

発災から2年。 男女共同参画の視点でみる熊本地震

まさか熊本に地震が…という悪夢のような体験から2年。明かりをつけたまま、いつでも飛び出せる服装で寝るという生活からは抜け出せたものの、震度1でもヒヤッ…とする感覚は今も変わらない。先日は久々の震度4。瞬時にお風呂の水を貯め、持ち出し袋と携帯の充電の確認をした。『災害はいつでも、どこでも、今すぐにでも起こる』ということを決して忘れてはならない。

2年前、私は熊本市の男女共同参画センターの館長(指定管理)として業務にあっていた。発災直後、「男女共同参画センターとして、最優先に取り組むべきことは何か?」と迷っていた時、全国女性会館協議会が構築していた「相互支援システム」の存在を、スタッフが知らせてくれた。不安と恐怖と混乱の中で、全国のセンターとITを通してつなが

った時の喜びは、言葉では言い尽くせない。そしてそのつながりこそが、私たちが発災後に動き出すための知恵と原動力になった。私たちが男女共同参画の視点から取り組んだのは、①性被害・DV防止のための啓発活動②避難所の環境整備のためのキャラバン③支援者支援④親子支援⑤若者支援が主なものである。振り返ってみるとそれぞれに課題は残したものの、男女共同参画の視点で瞬時に動き出したことは、意味があったと思っている。

熊本地震から2年が経過し、性被害やDVについても徐々に声が始まり、先日は実刑判決も出た。被災した上に性被害…と、考えるだけで胸が張り裂けそうになる。“平時に起こることは、非常時にはそのリスクが高まる”ということ、すべての人に覚えておいて



ふじい ゆきこ
藤井 宥貴子
くまもと県民交流館パレオ館長

いただきたい。だからこそ日頃からの備えと、人とのつながり、そして想定外の出来事にも対応できる地域力を高めておくことが重要である。誰か任せの防災など、あり得ないのである。また災害現場の意思決定の場にこそ、女性が必要であることも痛感した。災害時こそ、その地域の男女共同参画の在り方が問われる、と言っても過言ではないと思う。

今、私たちは県が掲げる「創造的復興」に向かって歩み始めている。しかし「男女共同参画社会の実現なくして熊本の真の復興はあり得ない」と、私は声を大にして言いたい。そしてこの思いを、これからのチカラに変えて進んでいきたい。どんな時にも、すべての子どもが笑顔でいられる未来をつないでいくために…。

& MORE

テーマ 「北欧から見た日本、日本から見た北欧に気づく本」

しらかわ とうこ
白河 桃子 (相模女子大学客員教授)

北欧の大使館とおつきあいがあるが、インターンで来ている北欧女子は「日本のマンガが好き」という人が多い。日本でマンガエッセイ(「北欧女子オーサが見つけた日本の不思議」)を出版するスウェーデン女性もいるので、彼の国でも日本のマンガは愛されている。

北欧といえば、幸福の指数が高く、男女平等、子育て支援は世界のお手本だ。労働時間は短く生産性は高く、しかし税金は割と高い。オーサも「長時間労働」に驚き、「余暇のために働く」自国と日本人の仕事好きのギャップを描いている。また「男女平等」にみんなが賛成で日常的に「性差別」や「性的対象化」(性的に消費するものとして扱うこと)について議論されている国だ。「性的対象化」という概念自体を日本人が知らないことにもオーサはショックを受ける。

意外だったのは「週末以外はお酒を飲まない」スウェーデンの習



慣。政府が管理する店でしかお酒は買えない。大使館のパーティでは強いお酒で乾杯していたが、「毎日ビール1杯」という習慣は「アル中じゃない?」と思われるらしい。サウナでは裸でつきあうのに、シャイで人見知り。仲良くなるのに2年かかるのにハグの文化がある。この本を読むとスウェーデンにいきたくなる。

- 北欧女子オーサが見つけた日本の不思議①～④
- オーサ・イエークストロム 著 ■ KADOKAWA
- 2015年初版 ■ 1,000円～1,100円(税別)

Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

ジェンダー問題解決の
カギを提示する
最前線書誌情報誌



ダブルケアを前提とした社会設計を



そうま なおこ
相馬 直子

横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授

狭義と広義のダブルケア

晩婚化・晩産化・高齢化により、「育児をしながら介護」という「ダブルケア」に直面する人が増えている。また、介護に限らず、育児をしながら夫のケア、自分のケア、障がいを持つ兄妹のケアなど、広い意味での「多重ケア」ととらえる見方もひろまってきた。

この狭義・広義のダブルケア概念を、英国ブリストル大学・山下順子上級講師と開発し、2012年度より共同研究を進めてきた。当初はダブルケアの政府統計がなく、多方面の協力をもとに調査を重ね、以下のような実態が浮き彫りになってきた。

- ① 介護・子育ての縦割り行政のはざまで、ダブルケアラーが孤立し、ケア責任・負担・ニーズが複合化している
 - ② 介護保険制度が生み出した「介護サービスのマネジメント」責任を、多くの娘や息子が担っており、嫁規範が弱まる中で、ダブルケアは男性・女性両方の問題となっている
 - ③ 依然として根強い母親規範のうえに、ダブルケアになると、娘規範が折り重なって、負担が高まっている
- 各自治体でも実態調査が行われ、大阪府堺市ではダブルケア総合相談窓口が設置されたり、各地で特養や保育園の入所基準がダブルケア視点から見直されている。また、ダブルケアカフェの開催や、ダブルケアハンドブックなどの活動も広がってきた。

新しいケアワークの「社会的な発見」

内閣府が2015年度にダブルケア実態調査をした意義は大きく、政策課題となった。しかし、いつも突きつけられるの

は、「育児と介護の両立を考える会」という当事者団体が2000年代より問題発信してきたにもかかわらず、なぜ、「育児と介護の両立」というケアワークの「社会的な発見」がこんなにも遅れたのか、ということだ。

介護保険の給付抑制、障がい児支援策の不足、待機児童問題、両立しにくい就業環境、雇用の非正規化のなか、ダブルケア負担を家族が丸抱えしている実態がある。また、私たちの暮らしや人生は、いろいろなケア(狭義・広義のダブルケア)があるが、社会の制度は、育児や介護といったシングルケアの発想から縦割りであり、非効率である。

磁石としてのダブルケア

シングルケアの発想や縦割り構造を問い直すうえで、ダブルケアは「磁石」のようだ。まず、ダブルケアラーが様々な人を引き寄せ、支え合いをつくる「磁石」である。よって、当事者のダブルケア認知が最も重要だ。また、ダブルケアラーを支える人々も「磁石」である。ダブルケアラーの困りごとを全人的に受け止め、児童・高齢・障がいと対象別の縦割り政策を問い直す試みがはじまっている。

そして、ダブルケアはいくつかの課題を引き寄せる「磁石」でもある。根強い性別役割分業、長時間労働、雇用の非正規化、貧困といった現代の諸課題がダブルケアには内包されている。ダブルケアを磁石に、その人が抱える複数の課題を、全人的にとらえ、ダブルケアをしながら働くことが当たり前な社会、ダブルケアを前提とした社会設計と支援策の開発が急務である。